

# 近年のマイワシ資源

資源管理部 主任研究員 吉村 直人

## 【目 的】

マイワシ (*Sardinops melanostictus*) は、日本近海に広く分布する代表的な浮魚類であり、古くから我が国の食文化と深く関わってきた重要な水産資源である。食用としては、干物、煮干し、缶詰など多様な形態で利用されているほか、飼料原料や健康食品原料としても活用されており、食用・産業用の両面において高い重要性を有する。鹿児島県においても、養殖用飼料や水産加工原料として広く利用されている。

マイワシは「漁獲量に周期性がある魚種」とされており、実際に漁獲量は長期的に大きな増減を繰り返してきた。全国漁獲量が 100 万トンを超えた期間は 1976 年から 1994 年であり、そのピークは 1988 年の 449 万トンであった。一方、10 万トンを下回る低水準の期間は 1965 年から 1972 年および 2002 年から 2010 年にみられ、1965 年には約 1 万トン、2005 年には約 3 万トンまで減少した年もある。近年では再び漁獲量が増加傾向にあり、2023 年には全国で約 69 万トンが漁獲された。鹿児島県においても、2024 年の漁獲量は 29 年ぶりに 1 万トンを超える水準に達した（図 1，2）。

このような近年のマイワシ好漁の状況下において、鹿児島県におけるマイワシ資源の漁獲動向に関する知見は不足している。そこで本調査では、漁獲物の精密測定および調査船「くろしお」による卵稚仔調査の結果を用い、鹿児島県近海に来遊するマイワシの漁獲動向を把握することを目的とした。また、鹿児島県が参画し漁獲情報や測定結果等の情報を提供している水産研究・教育機構水産資源研究所が公表しているマイワシの対馬暖流系群の資源評価書の内容についても紹介する。

## 【材料及び方法】

### 1 鹿児島県のマイワシの漁獲動向と精密測定

主要港（阿久根、枕崎、山川、内之浦）における漁獲量を集計し、漁獲物の体長組成および年齢構成を明らかにした。

### 2 卵稚仔調査の実施

東シナ海および日本海西部海域における浮魚類等の卵・稚仔魚の分布および発生量を把握するため、調査定点において改良型ノルパックネットおよびニューストーンネットを用いてサンプルを採集し、鹿児島県近海におけるマイワシ卵稚仔の分布状況を調査した。

### 3 漁獲予測

鹿児島県の過去の漁獲情報を用いて、2026 年 1～3 月の漁獲量を予測した。

## 【結果及び考察】

### 1 鹿児島県のマイワシの漁獲動向と精密測定結果

鹿児島県では 1996 年に 2,200 トンを記録した後、漁獲量は長期間低迷していたが、2013 年以降は回復傾向を示し、2024 年および 2025 年には 2 年連続で 1 万トンを超える漁獲がみられた。来遊の時期は春季（2～4 月）および秋季（9～10 月）にピークがあり、春季

には産卵のため沿岸域に接岸した1歳以上の大型個体（体長17～19 cm）が漁獲され、秋季には当年に生まれた0歳魚（当歳魚）である小型個体（体長10～13 cm）が主に漁獲されていることが明らかとなった。

## 2 卵稚仔調査の結果

卵稚仔調査の結果、2012年以降、鹿児島県近海ではマイワシの卵および仔魚は確認されていなかったが、2022年以降、西薩海域において卵および仔魚の採集が確認された（図3）。さらに、2024年以降は南薩海域においても採集されるようになった。過去の研究では、資源量の増加に伴い産卵場が九州南部へ拡大することが示されており、本研究の結果はマイワシ資源の増大を裏付けるものと考えられる。

## 3 漁獲予測

過去の漁獲情報をもとに、1～3月の漁獲量について相関を精査したところ、前年の春～夏（4～8月）の漁獲量との間に正の相関がみられた（ $r=0.835$   $p<0.001$ ）。この回帰式に基づき、2026年1～3月の漁獲量は4,458トンと予測した。

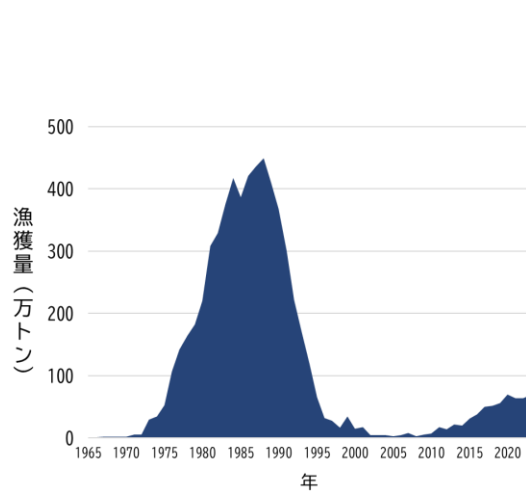


図1 全国のマイワシ漁獲量の推移

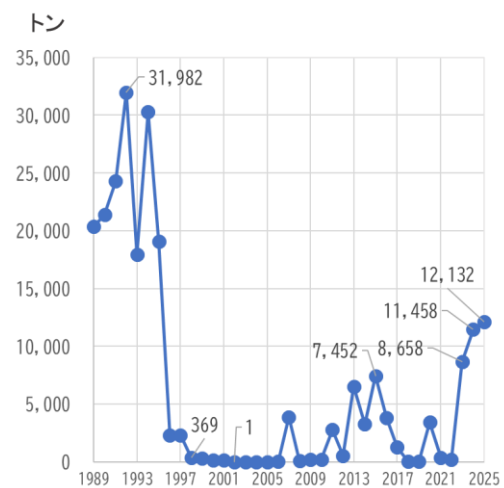


図2 鹿児島県のまき網による漁獲量（水産技術開発センター調べ）

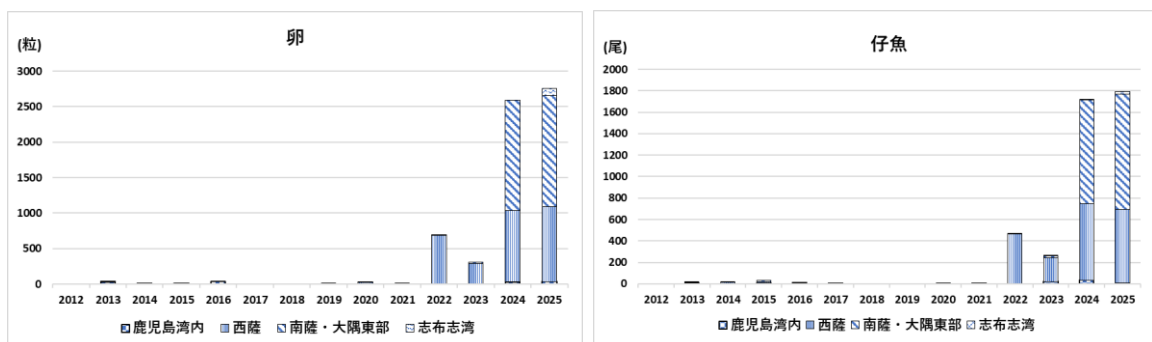


図3 鹿児島県近海におけるマイワシ卵稚仔調査結果（左：卵 右：仔魚）